

# 縦木神楽の復活物語

縦木神楽保存会長 黒木 計司

## 縦木神楽の復活物語

縦木神楽保存会  
会長 黒木 計司



こんにちは、縦木神楽保存会長の黒木です。

今日は、みなさんが一生懸命に頑張ってくれている縦木神楽のことについてお話をします。

皆さんが舞ってくれている縦木神楽は、宮崎県の高千穂神楽を元祖として、隣の宮崎県椎葉村向山（むかいやま）から縦木地区に伝わったと言われています。縦木では、今から200年くらい前から毎年10月25日の縦木天満宮大祭で神楽が奉納されてきました。

縦木の中でも神楽を代々受け継いできた神楽家系の家ごとに神楽を一つずつ受け持つ「持ち神楽」がその家の長男にだけ引き継がれ、長男のみが舞うことが許されました。

縦木では、毎年、順番に回す座元（ざもと）と呼ばれる神楽家系の家で持ち神楽を舞っていました。24日の御夜（ごや）の朝に縦木天満宮まで神様を迎えに行って、お宮で宮神楽・飯神楽・壺神楽を舞った後に座元に場所を移して、残りの神楽を舞っていたのです。だから、お宮で一番最初に舞う神楽を宮神楽というのです。



昔は、神楽が24種類もあったので、24日の夕方から25日まで夜通しずっと舞っていたそうです。

ところが神楽家系の家に男の子が生まれなかったり長男が都会に出てしまったり、何度も戦争が続いたことから、いつの間にか縦木神楽の伝統は消えてしまいました。それから縦木はひっそりと静まりかえり、楽しみが少なくなって人々は都会へと出て行く人が増えました。「このままじゃ、いかんばい。神楽ば復活させれば、地域も元気になるとじゃなかろうか」と考えた人たち数人が集まって縦木神楽保存会を立ち上げて学校や集会所で細々と練習を続けたのです。ところが一度消えてしまった神楽を復活させるのはとても厳しいものでした。その頃はビデオもなく中には殆ど忘れられていたりしていたので質問をしながら一つ一つを何度もメモをしながら失敗を繰り返し、長い年月を掛けて、やっとのことで13の神楽を復活させることができたのです。その話を聞いた八小の村上校長先生が、子ども達に縦木神楽を習わせることを決めたのです。ところが地域からは、「長男じゃない者には教えるわけにはいかない」



とか「学校で宗教色のある神楽を教えるのは問題だ」と反対の声が上がったのです。このままでは地域もさびれ縦木神楽は完全になくなってしまふことを必死に伝えたところ、やっとのことで1974年に児童神楽をスタートさせることができました。

児童神楽の指導は、保存会や地域の青年そして高学年担任の林俊郎先生が、最初は、56年生の男女14人に限って行ったものの、分からない所だらけで何度も椎葉村まで山を越えて調べに行ったそうです。

そのとき、一番最初に児童神楽を習ったのが6年生だった私や5年生だった黒木智光くんでした。児童神楽の練習を夏休みに3泊4日で学校に泊まり込んで、朝昼晩、徹底的に教え込まれました。全部の先生方やPTAが見守る中、地域の青年達は子供の足を自分の足の上に乗せて、難しいステップを踏みながら、両手を取って動きを一つ一つ教え込んでいったのです。ついに、その年の運動会で始めて児童神楽を披露したところ地域の人は大喜びで拍手大喝采で盛り上がりました。それから運動会や縦木天満宮大祭で児童神楽を奉納するようになり、テレビや新聞でも取り上げられ全国的



にも有名になりました。

最初は56年生に限って児童神楽に取り組んでいましたが、年々、子供の数が減ってきたために男女児童全員で取り組むことにしました。嬉しいことに、今では校長先生を初めとして全部の先生方で縦木神楽を舞っていただく伝統が出来つつあります。神楽を先生方が舞うと言うことは、地域への仲間入りの第一歩にもなっています。

また、縦木神楽の総元締めである太夫（たゆう）の村川千代次さんは、児童神楽が始まった時からの唯一の指導者です。小学生の時に千代次さんや神楽保存会員から厳しく指導を受けた児童神楽は、中学生になっても高校生になっても大人になっても体が覚えているために決して忘れることはありませんでした。

毎年、児童神楽の練習は、夏休みに入ると同時に体育館で週一回の夜間練習が始まりますね。一年ぶりの練習では忘れたところもあって、保存会の人から「そこは、そぎゃんじゃなかったろう」とか「もっと手ば上げんか」と自分の子供と同じくらいの檄が飛ぶこともあって嫌になることもあったかもしれませんが、それは縦木神楽をしっかり伝えたいという強い思いがあるからなのです。



運動会が終われば天満宮の本会場が移り週二回の夜間練習となりますが、頑張っている皆さんには本当に頭が下がります。

保存会員も子供達の練習が終わった後に仕事で疲れている体に鞭を打って先生方と一緒に夜遅くまで練習に頑張っています。

13種類の神楽が先輩から後輩へ、保存会員から先生方へとアドバイスが行われているのです。練習が終われば必ず全員が輪になって神楽などの雑談が延々と続きます。神楽が先生方と保存会の心をつないでいるのです。

そして10月の声を聞くと、地元の人でも都会に出ている人も縦木神楽のことで頭はいっぱいになります。自然と体がうずうずしてくるのです。私も「やっぱり自分の子供も泉八小で学ばせたい。神楽を舞わせたい」という思いがだんだん強くなって都会生活を止めて縦木に帰ってきました。その時も縦木神楽の太鼓と鈴の音が耳から離れませんでした。都会に出た人達も祭りの時だけでも縦木に帰ってきたいという人が殆どなのです。神楽が縦木を離れた人たちとも心をつないでいるのです。



10月の縦木天満宮大祭では、24日の御夜(ごや)そして25日の大祭では、神楽の舞が途切れることなく続きますね。たくさんの観光客が縦木を訪れて神楽の素晴らしさにみんなが感動します。シシ汁はもとより沢山の手作り料理とお酒が全てが無料で振る舞われ、観光客を心ゆくまでもてなしてくれる姿に、またまた感動されています。

このように、縦木神楽の伝統が切れてしまったことで、地域の人口が激減したり活気が無くなるなど、みんなが寂しい思いをしました。それから一度消えた縦木神楽を復活するまでには大変な苦労と時間がかかったのです。一度無くなってからこそ縦木神楽の素晴らしさにみんなが気づき、守り続けようとみんなが立ち上がりました。神楽復活のお陰で、皆さんの故郷縦木は、みんなの心が繋がっています。これからも縦木神楽を絶対に絶やしてはならないのです。みんなが一つにまとまって、次の世代に大切な縦木神楽と、おもてなしの心を引き継いで、いつまでも故郷縦木を元気にして行って欲しいと願っています。